あやめ十八番・第９回公演

『三英花 煙夕空』

作・堀越涼

【登場人物】

尼子鬼平　……盲目の骨董商。雨左衛門の弟子。
織部雨左衛門　……殺害された骨董商。鬼平の師。
織部やゑ　……雨左衛門の妻。
織部はる　……雨左衛門の娘。

西田昌造　……雨左衛門殺害事件を担当する刑事。

三彩梅花文六耳壷……唐の時代に創られた、副葬に用いられる万年壺。
にっかり平左兼正……にっかり笑う幽霊を斬った逸話で知られる大脇差。
お駒　……乾宝山『夜行四十六怪撰』の中の一つ、幽霊絵。

棕櫚（しゅろ）　……雨左衛門邸の蔵に住む十本足の蜘蛛。

＊＊＊

時代は大正。
囲み舞台で、舞台美術は無い。俳優の身体と声のみで舞台は進行していく。

俳優の一人が歩み出て、落語の枕よろしく、観客に舞台の諸注意を告げる。
日常と非日常、未だ混ざり合う内、開幕。

象嵌寺。浄土宗の読経が響き渡る。
唱えているのは“懺悔偈”（さんげげ）。現世、前世の悪行を懺悔する経。

全体　　我昔所造諸悪行、皆由無始貪瞋痴、従身語意之所生、一切我今皆懺悔
（がしゃくしょぞうしょあくごう、かいゆうむしとんじんち、じゅうしんごいししょしょう、いっさいがこんかいさんげ）

読経は“懺悔偈”から“十念”に乗り替わる。

全体　　南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏……

現代。谷中、象嵌寺
特別拝観中につき、お堂は観光客で賑わっている。
特別拝観の目玉は、“象嵌寺三宝”と称される、日本刀、壺、幽霊絵。
三宝は皆、どこかしらが破損している。

ガイド　　只今、皆様にご覧頂いておりますのが、当院にて 10 月初旬まで特別公開されております“象嵌寺三宝”でございます。右手より、“にっかり平左兼正”、“三彩梅花文六耳壷”、“『夜行四十六怪撰』の一つ、お駒の図”。中でも、“三彩梅花文六耳壷”は、台東区の重要文化財に指定されております。三宝はいずれも、大正６年まで谷中の豪商・織部雨左衛門が所有し、その後、当院に寄贈されることとなりました。これらの寺法が普段、非公開とされておりますのは、三宝にまつわる不可思議な物語に由来しております。ここでは、その稀有な逸話を、ほんの少しだけご紹介致しましょう。

蝉の声。
大正 6 年。織部雨左衛門邸の土蔵。
天井の巣から、蜘蛛が一匹、垂れ下がっている。
狂ったように独り言。

棕櫚　　品性は目に見えぬ。耳を欹て、聞くばかり。あのけたたましい囀りに、我々はハタと気づくのだ。蝉の品位の有りや無しや、を。九月と言うだに女遊びにうつつを抜かし、男子一生の生業を捨て、あたら若い命を散らす、蝉の品位の有りや無しや……品性とは沈黙よ。深いしじまに身を横たえ、哲学するが品性よ。その点、諸君らは優秀だ。この暗いアトリエに忘れ去られて早 10 年、不平不満の胸の内、たんだ一言も発さぬ様は、10 本脚の棕櫚様も、ただただシャッポを脱ぐばかり。しかし俺とて、よその蜘蛛と比ぶれば、そのエレガンスは明らかじゃ。品位、才覚、足の数、まずもってこの棕櫚様に、勝る蜘蛛はおるまいて。老いたる馬は道を忘れず、老いたる蜘蛛は蛾を逃がさぬ……待てよ。聞いたぞ。ヒグラシだ。蜘蛛の鵺が鳴きおった。振り子時計を確かめねば……さあ、諸君。独演会はこれで仕舞だ。最後に一つ、教えてやろう。天上から下がり蜘蛛があったから、じき来

客があるだろう……

町の警察署内の取調室。刑事・西田昌造と雨左衛門の妻・やゑの二人きり。
時代遅れの背広を着た西田と小奇麗な着物姿のやゑは実に対照的に見える。

昌造　我慢ならんですなぁ、今年の夏は。
やゑ　……。
昌造　上がケチでね、窓も無いのが申し訳ない。この蒸し風呂にお着物では……さぞお暑うございましょう。
やゑ　……いえ……紗（うすぎぬ）を選んで参りましたので……
昌造　そうですか。
やゑ　……。
昌造　たまに嫌んなりますよ。腕の良い職人連中の中には、もうそろそろ風呂屋を出て、麦酒にありついた者もあるかと思うと、ね。何で俺ばかりこんな事にと、惨憺たる思いに成ります。
やゑ　……。
昌造　まあ……しかし……蒸し風呂も風呂に変わりはありますまい。（ト笑う。）それにね、面白いんです、この仕事は。時にね。
やゑ　……。
昌造　そうですか。……では、まあ、全て認めると。
やゑ　はい。
昌造　ふぅん。何時ごろでしたかね。
やゑ　え？
昌造　御主人の寝室に入ったのは。
やゑ　……よく……覚えておりません。
昌造　覚えてない？
やゑ　はい。
昌造　そうですか。
やゑ　……。
昌造　モノは、ありゃ何と言うんでしょうね。懐剣と言うんでしょうか？
やゑ　播磨大碌菅原貞光。菖蒲造りの短刀でございます。
昌造　……ほお。御詳しい……流石、織部の奥方は良いものをお持ちだと鑑識が怖気づいておりましたよ。（ト笑う。）では、どうしてご主人を？
やゑ　……。
昌造　何故、何の為に、どうした訳で？
やゑ　……

昌造　……話したくなければ……
やゑ　主人は、骨董を見すぎました。
昌造　はい？
やゑ　もう長い事それ以外、見ようとなさらなかったのです。
昌造　貴方や、娘さんも？
やゑ　内弟子、女中、使用人、全てです。従順で物言わぬ骨董違い、私共は生きておりますので……
昌造　生きていれば……喉を突く夜もあるだろうと。
やゑ　……はい。
昌造　そうですか。まあ、良く分からんですからねえ、夫婦の事は。いや、実に結構な事でございます。こうして名乗り出て頂けますのは、我々としても大助かりで。しかしねぇ……奥様。
やゑ　……。
昌造　誰でも良いんじゃないんですよ。仕事ですからね、罪人に縄をかけなくては。
やゑ　……蒸し風呂に、ご苦労な事でございます。
昌造　（二度ゆっくり頷いて）高貴なご婦人でも、汗をかくのは変わりませんな。
鬼平　……目撃者も居りません。大方、私の言う事に異を唱えるものは居りますまい。どうぞ早う縛めて、後の処罰を早急に……奥様はそう仰ったそうな。
昌造　何か隠していらっしゃる。
鬼平　如何にも。
昌造　後ろに誰かいらっしゃる。
鬼平　如何にも。
昌造　腹に秘密を呑んでいる。
鬼平　正しくもって、その通り。
昌造　言いそびれましたがね、奥様。宅の内弟子・斉木象二郎という男、先ほど出頭して参りましたよ。全ての罪を認めるとね。
やゑ　……。
昌造　おかしな話です。これでは、どちらか、もしくはどちらも、嘘をついていることになる。
やゑ　……。
昌造　いや、それにしても暑い。頭がおかしくなりそうだ。

雨左衛門邸の蔵。
鬼平が雨左衛門の自室にあった三種の骨董、日本刀、壺、幽霊絵を丁寧に並べる。
天井に蜘蛛の巣。

棕櫚　　きっと、おかしくなっちまった。可哀想に、あの男。盲いた上にあの様子では、もう生きてはゆかれまい。

鬼平　　前代未聞、二十日だよ。はや二十日も降り通し、その上今日の大風も、どうやら雲を背負って来た。二十一日立て続けでは、この大黴も詮無い事。あれだけ百姓を苦しめた空梅雨も、どこかで帳簿は合うものだねえ。

棕櫚　　かれこれ五分のモノローグ、鑑定書付のキ印だ。

鬼平　　諸君らもこの大黴には、随分弱ったことだろう？

沈黙。

鬼平　　失礼。不作法だったかな。僕は織部雨左衛門が一の弟子、尼子鬼平と申すもの。目は不自由でも、話を聞くに障りは無い。さあ、大いに聞かせてくれたまえ。

長い間。

六耳壺　　……旦那様。

棕櫚　　……（予想外の事に驚いて）なに？

六耳壺　　手前どもは最前から、旦那様の独り言だとばかり思っていましたに、それはもしか、私共に言っておりますので？

鬼平　　誰有ろう、君たちにである。

棕櫚　　なんだこりゃ。

六耳壺　　では……間違いございませんな。

鬼平　　間違いはない。

棕櫚　　ちいとも頭が追い付かん。

六耳壺　　独り言ではございませんな。

鬼平　　左様。

棕櫚　　果たして夢じゃあないかしらん？

六耳壺　　声は届いておりますとな。

鬼平　　くどい。

棕櫚　　俺が狂ってしまいそうだ……前代未聞はこの男……

鬼平　　諸君らは、一昨日の夜の凶行を、しかとその眼で見たはずだ。事のあらましをお聞かせ願おう。

間。

鬼平　　どうした？お三方の内、どなたでも良い。どんな些細な事でも良い。

平左　……信用ならん、この男。
鬼平　うん？
六耳壺　（にっかり平左をたしなめるように）旦那様。相済みません。あんまり突然の事で、聊か動揺いたしました。先日の事といい、旦那の事といい、近頃は妙な事ばっかりでして。
鬼平　道理だな。
六耳壺　私共、お話しするのは一向構いません。ただ一つお聞かせ願いたいのが……旦那様は、私共の話を聞いて、それからどうなさるおつもりで？
鬼平　というのは？
六耳壺　いえね、目撃者といって我々の事、お巡りさんは信じますまい。旦那様の胸の内には、何か仔細もございましょうが、私共では考えが及びません。話を聞いて、一体どうなるものでございましょう？
鬼平　ふむ。知っても居ろうが、僕ぁ織部と同じく骨董商。モノの目利きが生業だ。
六耳壺　存じ上げております。
鬼平　講釈を垂れるようで恐縮だがね、真贋とは、骨董の世界だけに収まらん。森羅万象、すべてのものに、真か嘘が当てはまる。
お駒　……。
棕櫚　おや、哲学だね。
鬼平　今日、奥様が名乗り出た。犯行を認めたそうだ。
平左　奥様が……
お駒　嘘です。
鬼平　（微笑み）ようやく喋ったね。
お駒　……。
鬼平　馬鹿馬鹿しいのは、それから程無くして、内弟子の斉木象二郎も出頭した。私こそが下手人ですと……さて、この話を聞いて、諸君らは何を感ずる？
六耳壺　何を……と仰いますと？
鬼平　斉木の奴め、しくじったな。僕ぁ素直にそう思った。奴は忠義に目が眩み、奥様の望みを慮ることが出来なかったのだ。そんなやり方は賢くない。第一、勘繰られるじゃあないか。
平左　では、真の黒を探し出すのが、鬼平殿の忠義であると？
鬼平　忠義云々はいざ知らん。そんなもの、たかが浅瀬の水遊び。鬼平の興味は、もそっと深いわ。
平左　……。
鬼平　この狂言は贋作だ。二人の身体は宋ジのように青白く、そのどこにも罪が無い。わかるね？被っただけで罪は染みない。釉薬は乗らんのだよ。
六耳壺　仰る通りで。

鬼平　　贋作があるのなら、何処かに真作もある訳だ。僕はそれが見てみたくって堪らない。取り調べの真似事にこうして熱を上げるのも、それが骨董商、尼子鬼平の性分ゆえだ。
六耳壺　　ひどく……高尚でございますな。
鬼平　　俗物だと思ったろう？
六耳壺　　滅相もございません。
鬼平　　如何にも、俗物。それを証拠に、裏もある。まあ、綺麗ごとばかり話すのも億劫だから、ざっくばらんに話すがね。斉木の一件で、捜査は振出しに戻った。為に、僕にも、少し容疑がかかってね。６五銀。

織部邸の縁側。昌造と鬼平が将棋を打っている。
昌造は目の見えぬ鬼平に代わって、二人分の駒を動かす。

昌造　　痛いね、どうも……

ト、昌造、次の手を打つが鬼平には見えない。沈黙。
昌造、不思議に思って鬼平の顔を覗くが、すぐに自分の失態に気づき、

昌造　　ああ、またやった。５七金です、尼子さん。
鬼平　　では、７五飛。
昌造　　ひゃあ、強い強い。随分お好きと見える。
鬼平　　骨董屋は皆、将棋が好きで。仕方がないから覚えましたよ。
昌造　　仕方ない、か。（ト笑う。）あまりお好きでない？
鬼平　　骨董より面白いものなどありませんよ。
昌造　　いやいや、好きこそ者の上手なれ。逆もまた、然りですよ。６五歩。
鬼平　　７二飛車成。
昌造　　参ったな……よく覚えていられますね。
鬼平　　慣れました。
昌造　　逃げるほかないかな。４一王……
鬼平　　……。
昌造　　……斉木さんのことがあって、もう私ゃ何が何だかわからなくなりましてね。
鬼平　　そうでしょうな。
昌造　　随分、驚かれたでしょう？
鬼平　　無論です。この三日で、織部の家は千年、歳をとりました。間もなく塵に変わりますよ。
昌造　　大黒柱を失ってはねえ……

鬼平　５三歩。
昌造　あちゃあ、そうか……
鬼平　不注意でしたな。
昌造　気もそぞろでね。
鬼平　捜査の事が気になりますか？
昌造　悲しいかな、振出しです。気にならん方が、不真面目でしょう。
鬼平　将棋など指さねば良いのに。
昌造　盤面を見ていれば、相手の目を見ず済むでしょう？９七歩。
鬼平　え？
昌造　楽なんですよ。こういう仕事には。
鬼平　僕は見えていませんよ。
昌造　ああ、失礼。うっかりした。
鬼平　……５二金。
昌造　容疑者は絞れました。しかし、その先が皆目わからない。雨左衛門の、弟さんに奥様、娘さん、内弟子・斉木象二郎、女中二人に使用人……それから、貴方です。
鬼平　……身内のものばかりだ。
昌造　そうですね。
鬼平　物取りの犯行とは？
昌造　考えておりません。第一がして、何にも取られておりません。十中八九、身内の筋で間違いない。
鬼平　そう仰るのは、どうした理由で？
昌造　月の無い夜、明かりも無しに喉を一突き。ホシはよほど家に詳しいか、さもなきゃ……
鬼平　……。
昌造　闇を暗いと感じぬ者です。
鬼平　……なるほど。僕など、その両方だ。
昌造　その眼、いつから見えんのですか？
鬼平　五年ほど前です。
昌造　どうして見えなくなったんですか？
鬼平　……割れた陶器の破片が……目に入りましてね。
昌造　どうしてそんな事になったんですか？
鬼平　もう誰かからお聞きなすったでしょう？
昌造　是非、もう一度、お聞きしたい。
鬼平　……こうして壺を抱えているとき、先生に拳骨を喰らいまして。愚図だから、目を瞑るのが遅れました。
昌造　そうですか。お気の毒にね。

鬼平　　僕が悪いのですよ。織部の金で、どうしようもない屑を買ったのですから。
昌造　　よく破門になりませんでしたな。
鬼平　　お情けですよ。
昌造　　時には先生を、恨めしく思う夜があるでしょう？
鬼平　　西田さん。……長考ですか？
昌造　　３一王、です。
鬼平　　４二金。
昌造　　４二飛。
鬼平　　４二龍。
昌造　　４二王。
鬼平　　（笑って）この取り合いには意味が無い。
昌造　　ええ。しかし、職業柄、ここで引くのもどうかと思いまして。
鬼平　　では……９七金。
昌造　　私達の商売は良く似ておりますねぇ。
鬼平　　道具屋と刑事さんでは、随分響きが違いますな。
昌造　　いやあ、そうでもない。虚実、見極めることの、なんと難しい事か。
鬼平　　……。
昌造　　３二金。
鬼平　　……７一飛。

長い間。

昌造　　……そうか、さっき取られた飛車があったか……
鬼平　　駒でも人でも、元の身内が恐ろしい……
昌造　　（にっこり笑って）ありません。負けました。
鬼平　　ありがとうございました。
昌造　　ありがとうございました。お陰様で、良い息抜きになりましたよ。

場面戻って、雨左衛門の蔵。

鬼平　　これ以上、痛くもない腹を探られるのは、どうも目覚めが悪くてな。
六耳壺　……。
平左　　道理が無い。
鬼平　　なに？
六耳壺　これ。
平左　　真実を知って、それが鬼平殿の何になりましょうや。事件解決が鬼平殿の安穏と

して、その先になにがありましょう。
鬼平　なに、僕はただ……
平左　我々は、よぉく飲み込んでおりまする。人が自ら動くのは、頭の中で算盤を弾いている時だけ。
鬼平　真を追うのが損得だと？
平左　御無礼ながら、そう見えます。
鬼平　君は人を知らなすぎる。打算ばかりが人でない。
平左　熱心に我々を見るものは、皆、すべからくそうでした。
六耳壺　口を慎め。それが全てと限るまい。
平左　何故、反論なさらないのです。鬼平殿は、何か隠している。
鬼平　……。
平左　西田という男の言う通り、疚しいことがあったと見える。
六耳壺　何を馬鹿な。
平左　私はもしか、あの夜の凶行は……
六耳壺　（強く遮るように）平左。

黙って聞いていた鬼平、突然、笑いだす。

鬼平　いや、まだ了見が浅い、浅い。僕が先生を刺したとな。なるほど、おかしい。この師弟関係の末路には、そんな答えもあったか知れん……

ふと寂し気な表情を見せる鬼平。

お駒　……。
鬼平　……なあ、諸君らは先生を愛していたか？
六耳壺　……答えるに及びません。朽ちぬ身体の我々が、どれほど長く生きたとしても、向後二度と……あれほどまでに目をかけて下さるお主（しゅう）は現れますまい。
鬼平　そうか……。先生の仇を、討ちたいか？
六耳壺　無論です。
鬼平　ならば、僕の一助となれ。主君に仇なす不忠の者は、今もこの家に潜んでいる。逃さぬわ。お前たちの小さな声は、尼子鬼平が拾い上げよう。
平左　……。
鬼平　（少し砕けて）そう怖い顔をするな。
平左　は？
鬼平　探偵ごっこに、ぬらぬらとその殺気では余りに鋭い。触れずに切れてしまいそうだ……

平左に近づく鬼平。ふと思い入れあって、辺りの匂いを嗅ぐ。

鬼平　　血の匂いがするな。
平左　　……。
鬼平　　三百年も昔の血が、今でも匂うものかしらん……

沈黙。

鬼平　　成程。見えてきたぞ、織部の疵が。このヒビは、メクラでなけりゃ気づくまい。

蔵の天井では……

棕櫚　　夕暮れは、黄泉と現世（げんぜ）の三途川。朝の蜘蛛なら仇でも逃がす、夜の蜘蛛なら親でも殺す。日暮れの蜘蛛は、ゆうらゆらりと綱渡り。きつく差し込む西日を見るに、外はすっかり茜空。命惜しくば、巣に引っ込めば良いものを……とてもじゃないが目が離せんわ。面白い。尼子鬼平、睨んだ通りのキ印じゃ。

音楽。
三彩梅花文六耳壷、丁寧に。

六耳壷　　生まれは中華民国が唐と呼ばれた頃の事。栄華極めし唐の国で、明器となるべく焼き落とされた万年壺にございます。本来なれば主と共に火葬され、死者の供物を運ぶべく、黄泉の旅路を共に連れ立つ運命にございましたが、ひょんなことから生き残り……ま、私にとっては唐天竺の果ての果て、ここ日の本へ流れつき、いかなる宿世の縁やら、織部雨左衛門様の元で御厄介になりました、齢千を超えましたる死にぞこないにございます。名を“三彩梅花文六耳壷”と申しますのは、淡い緑地の胴に、蝋抜きでもってあしらわれた梅の花。六耳とはすなわち、六つの耳。異形と称されて然るべきを、この歳まで随分可愛がっていただきましたは、身に余ることと存じております。
鬼平　　おお……見える。見えるわ。見えぬこの眼にありありと……堂々たる、大名物（おおめいぶつ）の風格よの。東国一と謳われた織部雨左衛門の蔵の中でも、先ず筆頭は其方であろう。
六耳壷　　勿体無いお言葉。
鬼平　　私財投げ打ち、ようやく譲り受けた夜、先生がお前を抱いて寝たという噂、もはや嘘とも思われぬ。

六耳壺　いや、まさか。

鬼平　骨董屋など、お前にとっては雨宿り。広く見れば国の宝よ、いずれはお返しせねばならん。しかし、一度でもその手に抱いたのなら、先生も、冥利に尽きたことだろう。

六耳壺　何と申せば良いのやら……

鬼平　（笑って）良い良い、何も言わいでも。さて、次は……掛け軸や、お前の話を聞かせておくれ。

音楽。
“お駒の図”、青ざめながら。

お駒　……私は乾宝山という浮世絵師の作で、題を『お駒の図』と申します。『夜行四十六怪撰』なる妖怪画・四十六連作の末娘で、明治３年に描かれました。骨董とは名ばかりの、五十年の年端もいかぬ若輩者にござりまして、お歴々の先輩諸氏を差し置いて、主・雨左衛門の寝室にかけられましたは、未だ痛み入ったる思いでおります。妖怪画とは申しましても、魑魅魍魎の類にあらず、その絵図面は十人並み。闇夜の柳の下に経つ、総髪の女が一人。年の頃なら、十七、八。枇杷茶に染めた着物の柄は、藤の花と蜘蛛の糸。幽霊画とは言いながら、柄の着物を纏いますのが、作者・乾の洒落心。まことお恥ずかしゅうございます……

鬼平　いや、その涼し気な物腰から、其方の気品が見て取れる。流石は全盛期、乾の作。優品佳品で済まされぬ。

お駒　いかい半端者に、ありがたきお言葉。

鬼平　が。美しさより袖を引くのが、お前に纏わる、かの噂。

お駒　……。

鬼平　“主殺し”のお駒とは、お前の事に相違ないかい？

お駒　……間違いはございません。

鬼平　話し給えよ。

お駒　……前の主も、その前も……いえ、遡れば乾宝山、私の生みの親までも、この半世紀で１７人、私を所有したものは皆、非業の最期を遂げております……。

鬼平　今際の際の乾宝山、這って筆に紅をつけ、着物の藤を赤く塗り、後の主に警告なしたという逸話、僕ぁ好きでね。

お駒　何の因果か知らねども、この身は呪われておりまする……

鬼平　お前が取り殺したのじゃないのかい？

お駒　滅相も無い。

鬼平　そうかい。妙な話があるもんだ。

お駒　……私が恐ろしゅうはございませんか？

鬼平　何、恐ろしいものか。（ト笑う）何しろ僕はお前が見えぬ。ただ、思い描いてみるだけだ……

フッと表情を失くす鬼平。すぐに我に返り、

鬼平　また主を亡くしたな。
お駒　……。
鬼平　腐るな。今回ばかりは、お前の罪とも言い切れぬ。のう？
平左　……。
鬼平　一昨日は、夜更けてお前、寝ちまったのかい？

音楽。
“にっかり平左兼正”、凛として。

平左　……元は飛州飛騨の国、刀匠・平左兼正によって鍛えられた大脇差にございます。桜井平五郎と申しますお武家様に仕えまして、家名、主を守護せんと、文字の通りに身を削り、身の丈二尺五寸の太刀が、今では一尺九寸九分。金の梨子地に桔梗紋、散糸巻の太刀拵え。鞘にも同じく桔梗紋。去んぬる寛永二年の事、にっかり笑う幽霊を一刀のもと切り伏せましたのが起こりとなり、以来、字（あざな）を“にっかり平左兼正”と申します。一昨年の大入札（おおいりふだ）で雨左衛門様の目に留まり、 以来、この家に仕えております。
鬼平　……（呟くように）なんと殊勝な、よう覚えたわ。
平左　……は？
鬼平　『音に聞こえた幽霊切り、大入札に流れてきたは、こりゃわしの天運じゃ』と、あの先生の弾む声……今でも、耳に残っておる。
平左　恐悦至極に存じまする……
鬼平　しかしな、平左、お前考えはしなかったかえ？刀剣に関しては門外漢の先生が、躍起になって競り落としたは、なにか仔細の有ることだろうと。
六耳壺　仔細？
鬼平　先生にはな、かねて所望の絵があった。それが……“主殺し”お駒の図。あのお人柄だ、欲しいとなったら手が付けられん。絵は欲しい、呪いは怖いに挟まれて、先生は随分、思い悩んで居ったよ。そうして、あの日、閃いた。
平左　……。
鬼平　幽霊斬り“にっかり平左兼正”と、主殺し“お駒の図”。この双方を睨み合わせ、お駒の祟りを消し去ろうとの目論見だ。まこと妙案、織部でなくては思いつくまい。まあ……先生は死んだがね。

平左　　悔いても悔やみきれませぬ。こんなことになるのなら、早う切り捨てておくべきだった。
六耳壺　　これ、お前は何を言う……
鬼平　　先生の喉を突いたのはお前だね。

呆気にとられる、壺。

六耳壺　　……え？
鬼平　　凶器となったは“にっかり平左兼正”だ。
六耳壺　　鬼平殿。差し出口ではございまするが、平左は事件と関わり合いがございません。凶器となったは、播磨大碌菅原貞光。それが証拠に只今では……
鬼平　　押収された貞光の、お前、話を聞いたかね？
六耳壺　　いや、それは……
鬼平　　鑑識も馬鹿な奴等だ。目に頼り過ぎて、血の匂いには気づかなんだか。
平左　　……。
鬼平　　どうだね、平左。お前が一番、知っておろう？

間。

平左　　切っ先がどこへ向かうかは、振るう者の意思次第。まこと、無念でござります……
六耳壺　　なに。
鬼平　　ようし、そこまで。ここから先の本題は、御一方ずつ話を聞こう。もうこの期に及んでは、隠し立ては罷りならん。

土蔵の天井。

棕櫚　　どこから忍び込むのやら。家と言うのはすべからく、物の怪の、一匹二匹は住み着くものだが、まさか俺の縄張りに、あれほどのモンストルが潜んでいたとは。終始見届けたその後では、屋移りせねばなるまいて……しかしまあ、妙な話があるもんだ。俺ばかりだと思っていたが、人も巣を張り、餌を待つのか。

音楽。
幽霊画の証言。

お駒　　夜の帳が下りますと、私たちも目を閉じます。骨董品のみる夢は、いつも遠い昔

の事。二度と帰らぬ佳き日のこと……あの夜もまた私は、肺を患って亡くなった三つ前の主の事を思い出しておりました。浅く、幸福な夢でございました。

鬼平　（主人の断末魔で目を醒ましたのかね？）

お駒　いいえ。目が覚めたのは、事が起こる前でした。不意に風が差し込んだので、誰かが障子を開けたのだろうと……

鬼平　（ならば、君は一部始終を見ていたと？）

お駒　見ていたと言って良いものやら……なにぶん、月の無い夜の事でしたので……
……闇の中で、顔までは……

鬼平　（そうか……その後、どうなった？）

お駒　人影は、始めに壺を持ち上げて、直ぐに思い直したように、床の間の刀を手に取りました。その後の事は……ご承知のとおりです。世の中に恐ろしいものは数あれど、人の末期の叫びだけは、慣れるという事がありません……ただ固く目を瞑り、後は震えておりますだけで・・

鬼平　（とすると君は、凶器が“にっかり平左”であると、知っていたね？）

お駒　……はい。にっかり殿が凶器であること、存じ上げておりました。手引きされたわけではなく、その方がにっかり殿の為になろうと……思えば、とんだ心得違い。伏してお詫び申し上げます。

鬼平　（知っていたのに黙っていたと。成程、なかなか罪深い。）

お駒　……。

鬼平　（何時ごろの事だったかね？）

お駒　……さあ、良くは覚えておりませぬが、日暮れに遠く、夜明けに遠い……ちょうど真夜中、１２時を超えた辺りでしょうか。

鬼平　（影の背格好は？）

お駒　……背格好なら五尺半、大柄な、男の方とお見受けしました。

音楽。
壺の証言。

六耳壺　恥ずかしながら私は、何者かに抱えあげられるまで、自分の身に何が起きたのか、一向わかりませなんだ。おそらく……ですが暴漢は、私の身を雨左衛門様の頭に振り落とそうとしたのでしょう。これでは命があるまいと、散々、肝を冷やしましたが、どういう訳か暴漢は、すぐに私を、元の褥に戻しました。

鬼平　（抱えたものの顔を見たかね？）

六耳壺　いや、残念ながら、ちょうど行灯の方を向く格好になりましたもので……後の事は、六つの耳で聞いただけ。

鬼平　（他に気づいたことはあるか？）

六耳壺　……気づいたことと言って……まぁこれは……
鬼平　（何だね？）
六耳壺　自賛するようで恐縮ですが、下手人は私の価値を知っている者かと……
鬼平　（ほう。）
六耳壺　一度取ったを躊躇って再び元に戻したは、雨左衛門様の身ではなく、私の身を案じての事。三彩梅花文六耳壷を壊すに惜しいと思ったか……
鬼平　（ホシは骨董に明るいと……）
六耳壺　あ、それから、これは間違いございませんが、あの夜、初めて行灯に灯を点しましたのは、内弟子・斉木象二郎。彼の寝間着には、べっとりと血が付いておりました……

音楽。
日本刀の証言。

平左　如何に時が移ろえど、この本身に沁み込んだ枕刀の気構えは、変わるものではありませぬ。あの夜、雨左衛門様の寝室に、招かざる来客があったことは直ぐに、気づいておりました。
鬼平　（では、下手人の顔を見たかい？）
平左　いえ、顔は見届けておりません。間もなく、瞑想に戻りました。
鬼平　（何故だい？）
平左　……薄手の浴衣が、風で揺れたように見えました故、あの影法師の正体は、てっきり、奥様であろうと思い込み……その……目を瞑ったが良かろうと……
鬼平　（ははあ、成程。その油断をつかれ、凶器に用いられたのだな。）
平左　返す返すも、不覚の至り……
鬼平　（犯人はお前を一度持ったはずだ。手の感触で、誰か判断できないか。）
平左　……ハテ、そう仰りますこと、御尤もではござりまするが、もはやこの身は織部の家の守り刀。床の間に飾られて、主・雨左衛門でさえ鞘から抜くのは稀なこと。感触だけではどこの誰やら……（ト、暫し考え込み）……マメ、節くれの見当たらぬ、柔らかな掌は女のものかとも思いましたが、それもただ奥様に違いはないとの思い込みか……
鬼平　（お前が主人の喉を突いた、その後の事を聞かせてくれ）
平左　……あまりの事に放心なし、おぼろげではございますが……賊は私を投げ捨てて、部屋から出たと思われます。暫くは己の無力を噛み締めながら、その場に横たわっておりました。闇を劈く金切り声が、二つばかり聞こえた後で、誰かが部屋に入って来ました。賊かどうかわかりませんが、その誰かによって私は、血を拭き取られ、元の鞘に収まったのです。思えばあの時、播磨大碌の短刀と私をす

り替えたのでしょう……

鬼平　（何故そんな事をしたと思うね？）

平左　にっかり平左兼正を家に残した理由は一つ。賊はお駒の祟りを怖れ、家を守ろうとしたのです。

音楽。

斉木象二郎の証言。しかし、その実、西田昌造の独演会。

昌造　確かに斉木君、凶器となった播磨大碌の短刀から君の指紋が見つかった。寝室からは血濡れの寝間着、状況証拠は完璧だ。ただ一点、欠けているものがあるとするならば、動機。動機、動機、動機、動機、動機、動機、動機。動機とは、犯罪の核を成すものだ。君の犯した殺人事件を、一匹の虎に例えるなら、動機とは虎の心臓だ。君の虎には心臓が無い。それでは虎は動かない。まった時を同じくして、奥様とお嬢様、女中、使用人の寝間着からも、雨左衛門氏のものと思われる、夥しい量の血痕が……発見された。余りの事に気が動転、心機一転、不倶戴天、亀の子半纏、有頂天、思わず縋りついたと言うなら、それも嘘とは言い切れない。ならば、逆に、君もただ、縋りついただけの一人に過ぎないとしたらどうだろう？洗いざらい話し給え。我々、正義は、真実を知る覚悟があるぞ。

鬼平の頭の中で、全ての証言がぶつかり合う。

音楽、盛り上がる。

一同　動機、動機、動機、動機、動機、動機、動機。

お駒　不意に風が差し込んだので、誰かが障子を開けたのだろうと

昌造　余りの事に気が動転

平左　闇を劈く金切り声が、二つばかり聞こえた後で

昌造　君の指紋が見つかった。

六耳壺　三彩梅花文六耳壷を壊すに惜しいと思ったか

昌造　思わず縋りついたと言うなら、それも嘘とは言い切れない。

お駒　日暮れに遠く、夜明けに遠い

六耳壺　内弟子・斉木象二郎

平左　賊はお駒の祟りを怖れ

昌造　心機一転　不倶戴天

六耳壺　これは間違いございませんが

お駒　背格好なら五尺半

平左　あの影法師の正体は

昌造　　亀の子半纏、有頂天
お駒　　月の無い夜の事でしたので
平左　　返す返すも、不覚の至り
お駒　　骨董品のみる夢は
六耳壺　血が付いておりました
昌造　　状況証拠は完璧だ
六耳壺　六つの耳で聞いただけ
お駒　　思えば、とんだ心得違い
昌造　　それでは虎は動かない。

六耳壺　べっとりと
平左　　べっとりと
昌造　　べっとりと
お駒　　べっとりと
一同　　血が付いておりました

土蔵。骨董たちの証言を聞いた後。

鬼平　　いやはや、実にありがたい。諸君らの貴重な証言を得て、ようやく賊の姿が知れた。先生を殺した犯人は、背格好なら五尺半、薄手の着物を身に纏い、骨董の知識に明るく、変化の術に精通し、時には男、時には女、時には奥様、時には斉木象二郎……次から次へと姿を変え、月の無い夜を這って出て、闇を自在に動くもの。素晴らしい。これで全て合点がいった。成程、人外。確かに、化け物。骨董商の一人や二人、喰い殺されて是非も無や。（怒りを抑えきれぬように）先生も運がなかったなぁ。最後の最後で、化け物に見初められてしまうとは。
一同　　……。
鬼平　　さようなら、諸君。御助力、大いに感謝しよう。僕はこの足で西田の元へ向かおうと思うよ。にっかり平左兼正から、指紋を採取してくれとね。
平左　　な……
鬼平　　これで犯人が知れるだろう。まだるっこしい事をせずとも、双方の望みは叶うと言うわけだ。
六耳壺　馬鹿な。それでは平左はどうなります？
鬼平　　無論、押収されるだろうね。帰って来るのは裁判が終わった後だから、一年先か二年先か、事によっては十年先になるかも知らん。
六耳壺　しかし、にっかり平左兼正は織部の家の守り刀。十年先までお家が続いているかどうかは……

鬼平　潰れてしまえば良いのだ、こんな家は。思惑だけが蔓延って、僕以外誰も、本当のことを口にせん。
六耳壺　旦那様は思い違いをしておられます。化け物など、居よう筈がありません。
鬼平　奇遇だな、僕もそう思う。第一、先生が浮かばれまい。いもしない化け物に、喉を食い破られたのでは。
六耳壺　今一度、改めて話をお聞きくださいませ。
鬼平　無駄だよ。お前たちの心根では、また違う化け物を生み出すだけ。
六耳壺　私はまことを申しております。
鬼平　三彩梅花文六耳壷よ、たといお前のいう事が、真実そのものであるとして、では、その他二名はどうだろう？
六耳壺　……お前たち……
鬼平　たわけ者めらが。この程度の真贋、見分けられぬと思うたか。
六耳壺　何故だ。鬼平殿を謀って、それが我らの何になる。雨左衛門様の何になる。包み隠さずお話するのだ。
鬼平　お前たちの願いは何だ？
六耳壺　……は？
鬼平　思惑の糸に、こうも絡めとられたままでは、お互い身動き出来んだろう。仕方がない。取引だ。
六耳壺　まことの犯人を探し出し、その手に縄をかけることです。それ以外、ありましょうや。
鬼平　おためごかしは、もう沢山だ。
六耳壺　もう私には何が何やら……
鬼平　言え。僕には手があり足がある。大抵の事はしてやろう。

間。

鬼平　……よくわかったよ。先生が骨董品を見すぎたように、諸君らもまた人間を見すぎたようだ。算盤勘定がお得意なようで……
一同　……。
鬼平　だがな、駆け引きは相手を考えろよ。
六耳壺　もう、よろしゅうございましょう……主人の為に生きれぬようでは、我々の価値は無くなりました。
鬼平　まだだ。逃がさんと言ったろう。
六耳壺　後生でございます……
鬼平　その刀は贋作だ。

間。

鬼平　　そこに居るのは、にっかり平左兼正の名を偽った、出来そこないの鈍らだよ。
平左　　……貴様。

ト、鬼平に飛びかかろうとするを、六耳壷が制す。

六耳壷　平左。
平左　　武士の命に何たる暴言。詫びろ。取り消せ。手を合わせて拝むのだ。
鬼平　　詫びねばどうする？何とするよ？先生と同じく喉を突くか。
平左　　その右腕、斬り落とす。
鬼平　　おお、おお。贋作風情が大きく出たわ。面白い、やってみろ。
六耳壷　鬼平殿、御下がりください。
平左　　斬る。必ず斬り落とす。
お駒　　もうお止めください。
鬼平　　骨董商というものは、己が審美眼に命を賭けるものである。たかが腕の一本二本、なに躊躇ってなるものか。やれ。見事切り落としたなら真作、骨で止まれば贋作だ。
平左　　……。
鬼平　　斬れ。
平左　　（黙って頭を振って）……。
鬼平　　斬れ。

その場に崩れ落ちる平左。

お駒　　にっかり殿……。
平左　　私じゃない……私は何も悪くない……
鬼平　　読み通り。
お駒　　……そんならあの日の凶行は、やはり私の（祟りであったか）……

へたり込むお駒。

鬼平　　幾ら専門外とは言え、雨左衛門に贋作を掴ませる馬鹿はおるまい。どこかですり替えられたのだな？
平左　　……（ト、黙って頷く）
鬼平　　いつだ？

平左　　……大入札の会場から、屋敷へ戻る道すがら……
六耳壺　　では、お前……織部についた、その時から……
鬼平　　誰の仕業だ？

長い間。

平左　　……斉木象二郎です。
鬼平　　やはり。
お駒　　どうして……
平左　　……。
お駒　　どうして黙っていたのです。何故、今まで騙したです。せめて私たちにだけ、本当のことを言ってくれれば……
平左　　言ってどうなる。何が変わる。私が恥を曝すことで、何か事態が好転したか。……何も変わらない……きっと変わりはしなかった……
鬼平　　そうだ。お前は何も悪くない。真贋を見抜けなかったから、先生は死んだのだ。
お駒　　……そんな話がありますか……
六耳壺　　止めなさい……。
お駒　　如何に模作であろうとも、大小なれば武士の魂。追腹切って然るべきを、責任逃れの逃げ口上……主人の喉を突いておいて、それが刀の言う事ですか。
平左　　黙れ。お前たちにはわかるまい。歴史も無く愛も無く、古美術としての価値も無く、ただ、金の為だけに造られた、贋作の侘しさは……。
お駒　　……。
平左　　愛されたいと願って何が悪い。にっかり平左兼正は織部の家の守り刀だ。少なくとも、この屋敷の中でなら、私は真作になれるんだ。……悪くない……
鬼平　　悪くない。
平左　　悪くない……
鬼平　　悪くない。
平左　　悪くない。この身は清廉潔白だ。鬼平殿、この女です。主人を殺めたは、この女。
六耳壺　　だまらっしゃい。

六耳壺の怒号に、一座、固まる。

六耳壺　　……鬼平殿。貴方が何をなさろうとしているのか、私には理解できません。我々の袂を分けて、一体何になりましょう。
鬼平　　言ったろう。僕はただ、真をこの眼でみたいだけ。
六耳壺　　これ以上は意味がありません。

鬼平　　ならば諸君は、この家を潰すおつもりか？
六耳壺　　……は？
鬼平　　お駒、お前の主は誰だ。
お駒　　……雨左衛門様です。
鬼平　　先生は亡くなったよ。
お駒　　……。
鬼平　　主人が亡くなれば、お前の所有権は奥様に移る。幽霊斬りの無い今では、お前はじきに奥様を、行く末にはお嬢様をも取り殺し、織部はお家断絶だ。
お駒　　……嫌……兼正を……にっかり平左の真作を、斉木殿から取り返して。
鬼平　　とうに、金に変わったろう。内緒商いで流れたものは、骨董商の闇に消える。このメクラでも溺れる闇にな。
お駒　　……この上、私は、家までも……
鬼平　　案ずるな。取引すると言ったろう。お前の願いを叶えてやる。
お駒　　……え？
鬼平　　『お駒の図』は、尼子鬼平が譲り受けよう。

間。

平左　　なに……
六耳壺　　貴方は……お家の為に命を賭すと仰いますか？
鬼平　　僕とて、織部の内弟子だ。このまま絶やすも忍びない。のう、お駒。お前の望みは、主の生涯を見届けることだろう？
お駒　　……はい……
鬼平　　それなら、僕の処に来い。鬼平は死なん。お前の呪いは、僕が断ち切って進ぜよう。
お駒　　……（ト、不意に涙する）。
六耳壺　　……鬼平殿の忠義、しかと拝見致しました。数々の御無礼、平にお許し下されませ。
鬼平　　（笑って）死ぬと決まったように言うな。
六耳壺　　あ、いや……
鬼平　　僕は本当に死ぬ気はない。第一、顔も見ずに取り殺されたのではたまったもんじゃないからな。さあ、次はお前だ。
六耳壺　　は？
鬼平　　三彩梅花文六耳壷よ、お前の望みを言うが良い。
六耳壺　　いえ、望みと言って、私など……
鬼平　　叶えてやる。

間。

六耳壺　……そう……ですな……此度の一件、老体には少々、堪えました。お駒ほどではないにしろ、私も主の最期を見すぎたように思います。古美術としての役割はここで一旦区切りをつけ、千年昔の万年壺に戻ってみたく存じます。

鬼平　……副葬を望むか。

六耳壺　はい。

鬼平　雨左衛門と共に焼かれたいと。

六耳壺　出来得ることならば。

鬼平　（大きく息を吐き）骨董屋には酷な注文だが……相分かった。別れ花でその身を隠し、棺に入れて進ぜよう。

六耳壺　……おありがとうございます。

鬼平　では、最後に……

鬼平、平左を見る。

平左　……私こそがお家に仇なす不忠者……望みなど言えよう筈もありません。

鬼平　言わずともわかる。お前の望みは、本物になることだ。

平左　……。

鬼平　僕はお前を、本物のにっかり平左兼正にしてやることは出来ない。

平左　……はい。

鬼平　しかしな、平左。護り刀とは、その銘や真贋を問うものではない。要石であれば良い。この二年、お前は確かに先生の支えであった。（独り言の体で、）この鑑定は、胸に仕舞っておくとしよう。

平左　……。

鬼平　決して漏らさん。一族が、贋作・にっかり平左兼正を護り刀と信ずる内は、お前は確かに織部の家の神刀である。

平左　（震える声で）……精一杯に……勤め上げます。

各々の胸に万感の思いが浮かぶ内、鬼平、場を改めるように、

鬼平　さあて、僕も疲れた。そろそろ本当の事を聞かせてくれ。

間。

鬼平　　諸君らの中に一人、嘘の証言をしたものがあるはずだ。そうして、その者は恐らく、犯人の姿を見ていたと思う。誰だ？鬼平を欺いたのは。

長い間。

お駒　　……私にございます。
鬼平　　……おい……先が思いやられるな。
お駒　　面目次第もございません……
鬼平　　謝るのは後で良い。さあ。
お駒　　その前に、一つ。
鬼平　　うん？
お駒　　鬼平殿の胸の内には、まだほんの少しの……隙間がございますでしょうか？
鬼平　　どういう意味だ？
お駒　　にっかり殿の事同様、仕舞っておいて頂きたいのです。
鬼平　　他言無用と？
お駒　　……過ぎた願いと承知の上で。
鬼平　　心配するな。骨董の証言になど、耳を貸す者はおるまいて。僕以外、誰も、な。
お駒　　……ご覧のとおり、と言って良いのか……掛け軸の中で私は、闇夜に立っております故、他の者より夜目が効きます。あの夜の事は、全てこの眼にはっきりと……
鬼平　　顔を見たんだな？
お駒　　はい……
鬼平　　誰だ。

長い間。

お駒　　雨左衛門様を殺めたのは……織部、はる。雨左衛門様のお嬢様にございます。

間。

平左　　まさか……
鬼平　　間違いはないか？
お駒　　はい。
鬼平　　よもや嘘では済まされんぞ。
お駒　　間違いはございません。しかし、これには仔細の有ること。親殺しに至るまでの、抜き差しならぬ一通り、お聞きなされてくださりませ。

音楽。

お駒　　骨董品は動けぬとは、そりゃ人間達の思い込み。月の無い晩、ちょうど潮が満ちるが如く、館が闇に包まれますと、絵図の闇夜と外の闇夜が、地続きに……繋がります。そうなりますと私は、辺りが白み始めるまで、屋敷をそぞろ歩くのです。この二年、色んな事を見て参りました。無論、家の者は皆、寝静まっておりますけれど、深い闇を隠れ蓑、恋する御仁は逢瀬を重ね……

お駒の回想。
あの夜。土蔵で、はると象二郎が待ち合わせている。
漆黒の闇の中で、男女は声を頼りに……

象二郎　　お嬢様。
はる　　象二郎。
象二郎　　お嬢様。

二人の手が触れる。

はる　　（堪らず抱き付いて）ああ。象二郎。
象二郎　　お嬢様。
はる　　会いたかった会いたかった、会いたかった。もうすぐ死んでしまうところだった。
象二郎　　私もです。ああ、お可哀想に、夜露に濡れて……
はる　　よく顔を見せておくれ。（ト顔を近づける。）
象二郎　　いや、こう暗くては……
はる　　暗くったって良く見える。この肌も、この唇も、あたしの恋人に違いない。

暗闇で、はるの指が象二郎の顔の傷に触れる。痛がる象二郎。

はる　　ごめん。傷に触ったの？
象二郎　　なに、大したことはありません……ここまで来るのに、さぞご苦労なすったでしょう。
はる　　ううん、ちっとも。あたし、お前に言われた通り、お布団の中でずっと片目を瞑っていたの。明るい所は右の目で、暗い所は左で見たら、闇は闇でなくなるのね。今夜、とっても役に立ったわ。
象二郎　　そうですか。それはようございました。しかし、こんな夜更けでは家人は誰も起

きますまい。明かりをつけても大事ないかと……

はる　良いの。このままにしておくれ。

象二郎　……それは……

はる　恥ずかしいから、あたしだけが見えていたいの。

間。

象二郎　……お嬢様。私と逃げて下さいまし。

はる　え？

象二郎　随分お待たせ致しましたが、ようやっと金が工面できました。

はる　……お前……売ってしまったのかい？

象二郎　金払いの悪い客で、随分難儀致しましたが……

はる　なんて馬鹿な……

象二郎　無論、先生には申し訳なく思っております。けれど、内証商いの一つや二つ、若い道具屋なら皆、身に覚えのあることで。

はる　……。

象二郎　このまま、織部に残っても私たちに先はありません。先生のあの様子では、婚約の赦しはおろか、破門になるのも、はや眼前……不義の恋ならいっそのことに、今夜二人は逃げましょう。私は昼間の夢を諦めてでも、お嬢様と添い遂げたいと願うております。

はる　……そんならお前、あたしの為に全て捨てると言うのだね。

象二郎　はい。

はる　その言葉に嘘は無い？

象二郎　ありません。

はる　決して私を離さない？

象二郎　離しません。織部はるは、私の妻です。

抱き合う二人。

はる　嬉しい……あたしを貰って。象二郎。

象二郎　……はい。

はる　ああ、これでようやく、つかえが取れた。落ちる先が地獄でも、二人一緒なら寂しくないねぇ。

象二郎　……さ、もはや丑三つ。夜明けぬ先に……

はる　でもね、象二郎。

象二郎　はい？

はる　　お前のつくったそのお金で、女中は雇えるものかしら？
象二郎　……いや、それは……
はる　　一人くらい、無理かねぇ？
象二郎　……お嬢様、こりゃ当面の暮らし扶持。そう贅沢は叶いませぬ。
はる　　そうだよねえ。だったら、私達、ここに居ましょう。
象二郎　……は？
はる　　だって二人で暮らすんなら、お前が仕事に出ている間、あたしがご飯をつくったり、ややの子守をするのでしょう？そんな苦労は耐えられない。あたしはやっぱり、お嬢様で居たいもの。
象二郎　しかし、それでは……
はる　　恋をするのは悪いこと？
象二郎　……。
はる　　お父様はそう仰った。それは本当？
象二郎　違います。それは断じて、違います。先生は間違っていらっしゃいます。
はる　　だったら、逃げずに済むじゃない。あたし、考えたのよ。一生懸命考えて、お前の為にやったのだよ。全ての咎は、裏を返せば愛なのだから。
象二郎　……。
はる　　もう、誰もお前を打たないよ。

はるの奇妙な様子に、総毛だつ思いのする象二郎。
不意に土蔵の外から声がする。声の主は、やゑ。

やゑ　　はる。

固まる二人。

二人　　……。
やゑ　　はるや。ここに居るの？顔を見せておくれ。
象二郎　何故……。
やゑ　　はる。

やゑが土蔵の重い扉を開ける。やゑの提灯で辺りは、ほんの僅か明るくなる。
やゑ、はるの様子を見て……

やゑ　　……やはり、お前だったのだね。
象二郎　え？

象二郎、違和感を感じ自分の着物を見ると、べっとりと血が付いている。
悲鳴を上げる象二郎。

象二郎　　あ……あ……
はる　　あたし、悪くないわ……お父様が悪いのよ。
やゑ　　（はるの言葉に、ふと涙して）……そうだねえ。お父様が、悪いねえ……

やゑ、決意したように、

やゑ　　象二郎。播磨を。
象二郎　　……は？
やゑ　　家人に気取られぬように、にっかり平左の血を拭き取って、播磨の短刀とすり替えなさい。
象二郎　　し、しかし……
やゑ　　はるの命を守るためです。
象二郎　　……はい。

土蔵を飛び出る象二郎。
親子二人が残る。

やゑ　　（手を広げ）おいで。
はる　　御召し物が汚れます。
やゑ　　良いのよ。綺麗でなくっても……

はるとやゑ、抱き合う内に回想、終わる。

お駒　　……私はもう、いったい誰を恨んで良いのか、いったい誰が悪かったのか、わからなくなってしまいました。鬼平殿に嘘をついたもお嬢様を護るため、しかしそれさえ、わからぬのです……正しいものが何なのか……雨左衛門様を殺したのは私です。私の祟りです。お駒が主を……殺しました……
鬼平　　（震える声で）……見えた……見えたよ……僕もまだ、見えるんだな……
お駒　　……。
鬼平　　お駒。よくぞ、話してくれた。やはり、お前は僕のものだ。
お駒　　鬼平殿。そんなら私ゃ……

鬼平、にっかり平左を鞘から抜き、お駒を真一文字に切りつける。
一瞬の出来事に、呆気にとられる六耳壷と平左。
崩れ落ちるお駒。

鬼平　　僕が僕の絵を斬るのに、誰も文句はあるまいて。
平左　　お駒。

鬼平、次に、平左の刀身の横っ腹を思い切り地面に叩きつける。
ぽっきり折れて、二つになる平左。

鬼平　　いやはや、存外、斬れるものだね。喜べ平左。これでお前も“幽霊斬り”だよ。
六耳壷　……。
鬼平　　（独り言に）そうか……では奥様は何とかなるとして……やはり牢には、斉木に入って貰おうか……その方が……あ、いや、風が湿ってきた。片付けてから考えよう……
六耳壷　（感情を押し込めて、静かに）これは……なんとなされます……
鬼平　　ん？約束通り、お二方の願いを叶えてやったのだが？
六耳壷　……。
鬼平　　いかんなあ、諸君らは。歳はとっても、まるで若造。尼子鬼平を見誤ったな。
六耳壷　……不覚でございましたわ。
鬼平　　しょげるな。痛い目にあってこそ、審美眼は鍛わるのだ。
六耳壷　ご説明を。
鬼平　　この後の僕の動きを？する必要はない。が、まあ手向けだ。教えてやろう。僕は、お嬢様を嫁に貰うよ。
六耳壷　・・そんな事はできません。
鬼平　　容易いよ、奥様とはるを脅しつければ。五月蠅い斉木は檻の中だ。あの臆病者め、随分手間を取らせおった。
六耳壷　手間……？
鬼平　　にっかり平左兼正を贋作とすり替えたのは、僕だよ。
六耳壷　……。
鬼平　　いや……違うな。正確には、すり替えたのが斉木象二郎。唆したのが尼子鬼平。すぐに売っ払えば良いものを、きゃつめ怖気づいて、この家の何処かに隠しておいたな。道理で祟りの無いわけだ。
六耳壷　何の為に、そんなことを。
鬼平　　それくらいはわかるだろう。
六耳壷　見る目がございませんもので。

鬼平　　そう、その通り。
六耳壺　は？
鬼平　　眼だよ。この眼の仇を討ったのだ。
六耳壺　……。
鬼平　　僕の目は凄かったんだ。どんな難しい真贋も、些細な疵もぴたりと見抜いた。僕はこの眼が好きだった。数々の名品をその網膜に焼き付けて、僕の景色を人より豊かにしてくれた。……今は何も見えん。真っ暗闇だ。
六耳壺　……。
鬼平　　あの壺も、間違いなく真作だったんだ。それを贋作と決めつけて、自分の目が利かないことを棚に上げ、僕一人を闇に落とした。死んで当然。殺されて、然るべし。
六耳壺　御無礼ながら、貴方は狂っておられます。
鬼平　　そりゃあ狂おう。盲人の孤独を、お前たちは知るまい。この闇は、纏わりついてくるのだよ。
六耳壺　……。
鬼平　　眼が見えた頃、あんなに慕って来た弟弟子たちは、あっという間に掌を返した。あの斉木だって同じこと。女達は見向きもしない。そりゃあそうだ、僕を愛せば一生の世話が付き纏う。もう僕は、人間と言うものを諦めた。損得でしか生きられぬ、胴慾で傲慢で、我が身可愛い生き物に、ほとほと愛想が尽きたのだ。……僕は、はると一緒に逃げるよ。織部の金だけ頂いて、向こうで道具屋を開くんだ。無知で無学で美しい骨董だけをかき集めて、たわいないお喋りに残りの人生を溶かすのだ。僕自身、骨董品になるまでね。
六耳壺　……。
鬼平　　さようなら。三彩梅花文六耳壷よ。最後に願いを叶えてやろう。この蔵と共に燃えたまえ。今こそ役目を果たすが良い。

鬼平が、蔵に油を撒く。
天井の蜘蛛が、六耳壷に話しかける。

棕櫚　　おい。……壺や。
六耳壺　……。
棕櫚　　壺や。聞こえるか？

天井を向こうとする六耳壷を声で制す。

棕櫚　　いや、そのままそのまま。上は向くな。俺の声が聞こえておるなら、ゆっくり頷

いてくれれば良い。

六耳壷、ゆっくりと頷く。

棕櫚　俺は、この蔵に住み着く棕櫚と言う名のアシダカグモ。いやさ、案ずることなかれ。その鬼平と言う男、如何に骨董の声を聞き分けようと、虫の声までは聞こえまい。

六耳壷　……。

棕櫚　いや、しかし、お互い難儀な事よなあ。夕暮れを、逢魔が時とは良う言うた。これだけ無垢な魔に魅入られては、五体無事では帰られまい。お前にとってはその身の不運、俺にとってはとばっちり。舞い散る火の粉に追いたてられて、いずれは蜘蛛の姿焼き。そこで、どうだね？

六耳壷　……。

棕櫚　これから落ちる灼熱地獄、お前にならば耐えられるかな？

六耳壷　……。

棕櫚　一度は焼かれて生まれたその身、ヒビ・欠けの無い極上品なりゃ、蓋を閉めれば壷中天。ここで会うたも天の計らい、この痩せ蜘蛛に情けをかけ、お前に俺を匿ってくれ。

六耳壷　……。

棕櫚　鬼平じゃないが、その代わりには、お前の願いを叶えてやろう。

六耳壷　……。

棕櫚　さあ、言ってみろ。この化け蜘蛛に出来る事なら。

鬼平が油を撒き終わり、懐からマッチを取り出す。

鬼平　最後に何か、言い残すことはあるかね？

棕櫚　さあ。

六耳壷　……人と物とを繋ぐのは定めと言う名の赤い糸。

鬼平　……なに？

六耳壷　決して切れぬその糸手繰れば、三悪道（さんなくどう）に落ちたとて、いずれまた、お会い出来るでございましょう。

鬼平　そうだな……すぐに会えるよ、お前の主に。

棕櫚　承知致した。

鬼平　ん？

鬼平、天井から気配を感じるが、押し黙る蜘蛛を捕らえることは出来ない。

鬼平　　……向こうに行ったら、先生と僕の目に、よろしく言っておいてくれ。

鬼平が蔵に火をかける。火の手は撒かれた油を伝い、あっという間に燃え広がる。
鬼平、すぐに蔵を出て、外から重い扉を閉める。

炎の中、六耳壷が、にっかり平左の切っ先と、お駒の上半身をその胴にしまい込む。
最後に蜘蛛が、ひゅっと壺の中に入りこむ。
灼熱がその身を焦がすのを、じっと耐える六耳壷。
夕暮れ空に、もうもうと煙が立ち上がる。暗転。

火災から暫く後。西田と鬼平が、縁側で将棋を指している。

昌造　　７六銀。
鬼平　　……８八玉。
昌造　　（呟くように）……もう少しでいけそうなんだがなぁ……
鬼平　　……。
昌造　　（焼け残った蔵が目に入り）あの雨は、良かった……
鬼平　　え？
昌造　　半焼で済んだのは、あの雨のお陰でしょう？
鬼平　　ああ……そうですねぇ。
昌造　　あれだけの火で人死にが出なかったのは、本当によろしゅうございました。
鬼平　　とんでもない。数々の名品が、あの不審火で焼失しました。織部にとっちゃあ大損害です。
昌造　　ふむ、まあね。
鬼平　　特に、壺は、惜しい事をした。
昌造　　壺？……茶器ばかりで、壺などあったかな……７七金。
鬼平　　ありましたよ。飛び切りのが。
昌造　　……。
鬼平　　８九玉。
昌造　　……雨左衛門さんの事といい、お祓いをした方が良い。
鬼平　　ええ、しかし……
昌造　　しかし？
鬼平　　手遅れですよ。
昌造　　……８七銀成り。
鬼平　　……第一審はいつですか？

昌造　一週間後に決まりました。
鬼平　そうか。残念だが、行けそうにないな。
昌造　……ご結婚なさるんですって？
鬼平　はい。
昌造　おめでとうございます。
鬼平　ありがとうございます。
昌造　越されるんですか？
鬼平　（笑って）この土地では、もう生きていけんでしょう。
昌造　雨左衛門さんの喪が明けないうちに、随分と大胆な事ですな。
鬼平　塗り替えるんですよ。
昌造　え？
鬼平　不幸続きの織部の家を、せめて些細な祝い事でね。
昌造　……。
鬼平　７一角成り。
昌造　……詰めきれなかったか……７一王。
鬼平　７二歩。

間。

昌造　ありません。負けました。
鬼平　ありがとうございました。
昌造　ありがとうございました。

鬼平、立ち上がる。

鬼平　さようなら西田さん。貴方、面白い人だった。もう二度とお会いすることも無いでしょう。
昌造　……さようなら。

鬼平、杖をついて立ち去る。
西田、去りゆく鬼平の着物の端に蜘蛛の糸が絡まっているのを見つけ、

昌造　尼子さん、着物の端に……

鬼平にはその声が届かなかったか、そのまま立ち去る。

昌造　　……。

西田もハンチングを被り、その場を去る。
蜘蛛の影が、糸を手繰り、鬼平の後を追う。

象嵌寺。ガイドが観光客に説明をしている。

ガイド　尼子鬼平はその後、埼玉県桶川市に在を移し、骨董商として不自由のない暮らしをしておりました。そんな、或る夜……

再び過去。大正７年。
鬼平が、骨董たちと楽しそうに話をしている。

鬼平　そうか……よしよし、可哀想に……そう思い詰めるでない。お前は何にも悪くないよ……さあ、お前も謝ったが良い。全く、喧嘩ばかりしおってからに。（ト笑う。）

家の外から声が聞こえる。

お駒　御頼み申します……
鬼平　……。
お駒　御頼み申します……
鬼平　（奥に）はる。はるや。どなたか見えたぞ。はる。

沈黙。

鬼平　全く、仕方の無い女だ……

ト、立ち上がり、戸を開ける。
足の無いお駒が六耳壷を抱えて立っている。

お駒　御久しゅうございます……
鬼平　あ、いや、生憎と目が不自由なものでして……失礼ながら、どちら様でございますかな？
お駒　お約束の品、持参仕りました……
鬼平　約束？

お駒　　着物の端に絡まった蜘蛛の糸を手繰りまして、ようやくこの家が知れましたが、なにぶん足の無い身ゆえ、随分お待たせいたしました……

鬼平　　……なに……

お駒　　お約束通り“主殺し”お駒の図、お納めなされてくださりませ。

鬼平　　……南無三……

六耳壷から、平左の切っ先が飛び出してきて、あっという間に鬼平の喉を突く。
どこからか読経が聞こえてくる。ゆっくりと崩れ落ちる鬼平。

一同　　南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏……

現代。象嵌寺。

ガイド　　お駒の抱えていた壺は、勿論、三彩梅花文六耳壷。その中から、にっかり平左兼正の切っ先が飛び出して、あっという間に、喉を突きます。不思議な事には、喉を突かれた尼子の様子は、主人・織部雨左衛門に酷似していたと言い伝えられております。見事、主人の敵を討ったこの三種の骨董は、“象嵌寺三宝”の名と共に、“仇討ち三宝”とも呼ばれております。

お駒　　『三英花 煙夕空』というお話でございました。

因果は廻る。

幕。